

信長と弥助

遠い国から来た侍



「一五八一年の春、ある宣教師が、アフリカから一人の男を京都に連れてきました。男の肌の色は黒く、背は六尺あまり、今でいう百八十センチをこえる大男で、誰も見たことのない人の姿でした。男をひと目見ようと町には人が集まり、おしあいへしあいになって、けが人が出るほどのさわぎになりました。そのうわさは、織田信長の耳にも入り、信長はすぐにその男を城へ呼び寄せました。」

男と出会った信長は、初め、男の肌の色信じませんでした。なぜなら、男が肌に墨をぬっているのだろうと思ったからです。そこで信長は家来に男の体を洗わせました。けれども、いくら洗っても肌の色は変わりませんでした。信長はようやく、これが生まれたままの肌の色なのだと理解したのです。

信長はこの男に魅力を感じ、家来にしました。弥助という名をあたえ、刀を持たせ、家もあたえました。弥助は信長のそばに仕え、出かけるときには刀を持って歩いたと伝えられています。外国から来た者が、日本で侍になる。当時の日本にはない出来事でした。まして、海の向こうから来た者に刀を預けるなど、誰も考えないことでした。信長は、生まれた国でも、肌の色でもなく、目の前の男そのものを見て決めたのです。

一五八二年六月二日の夜明け前、明智光秀が兵を率いて信長を襲い、信長は火の中で命を落としました。本能寺の変です。信長が襲われた時、弥助も本能寺にいました。命からがら逃げた弥助は、信長の子・信忠のいる二条の御所（天皇の子が住む屋敷。本能寺から北東へ八百メートルほどの距離）へ走り、明智軍と戦いました。しかし、戦いの中で力つき、明智軍に捕らえられました。光秀は捕らえた弥助を「異国の者だ」と言って、南蛮寺という寺へ送りました。そのあと、弥助がどこへ行ったのか、書き残したものは一つも見つかっていません。ただ一つ、たしかなことがあります。信長が最後までそばに置いていたのは、遠い国から来た、弥助でした。

選択

信長の人の選び方について考えてみましょう。次のうち、文章に合うものはどれですか？選んで○をつけましょう。

- ①身分の高い家に生まれた者だけを、家来にした
- ②生まれた国や見た目ではなく、その人そのものを見た
- ③力の強い者よりも、字の読める者を選んだ

記述

あとの10個から言葉を選んで（ ）に入れ、文章全体をまとめましょう。

- 一五八一年、ある宣教師がアフリカから一人の男を京都に連れてきました。男の（ ① ）の色は黒く、町は大さわぎになりました。うわさを聞いた信長はその男を（ ② ）へ呼び寄せ、墨をぬっているのではないかと疑って体を洗わせました。それでも色は変わりません。信長はその男を（ ③ ）にして、弥助という名をあたえました。外国から来た者が侍になるのは、当時の日本に（ ④ ）ことでした。一五八二年、本能寺の変で信長がたおれたあと、弥助は明智軍に捕らえられましたが、光秀は「（ ⑤ ）の者だ」と言って（ ⑥ ）へ送りました。

家来 なかった 南蛮寺 声 肌 あった 異国 町 城 客

③	②	①
⑥	⑤	④

漢字

漢字に直して書きましょう。

(1) ぼうえき		
(2) たしかめる		
(3) ゆたか		

こたえ

信長と弥助

選択 せんたく

②

②が正しい（身分や見た目で決めなかった）

記述

①肌

②城

③家来

④なかった

⑤異国

⑥南蛮寺

漢字

(1)貿易

(2)確かめる

(3)豊か